ハワイ寮のことども

柏　　博

同志社のよき伝統は失なわれつつあるとはよく口にする言葉である。しかし過去への単なるノスタルジャーを感じて現実を嘆いてもことはじまらない。過去のよき伝統と遺産をうけつぎ、それを新しい次元において発展さすことこそ同志社人の課題であろう。現在同志社にあるいくつかのよき遺産の一つとしてハワイ寮をあげることができよう。

ハワイ寮は、その英語名であるFriend Peace Houseが示すように、もともと国際親の機関として、「平和の宮」として建てられたものである。その設立は同志社設立六十週年の昭和十一年にさかのぼる。セオドア・リチャード夫妻の好意により、ホノルルにあるフレンド平和奨学金財団と同志社大学が共同してハワイ寮の設立と経営にあたることになり、同志社病院長及び看護婦学校長であったベリー博士の建物に大修繕をほどこしてできあがったものである。

当時フレンド平和奨学金の日本駐在委員であった黒川直也氏はハワイ寮の性格を「同志社布哇寮は基督教的国際親善の増進機関であって単純な学生寄宿所ではない。で『同際親善のために努力しやう』という学生同志諸君を中心として寄り合いのホーム」であるといわれた。またハワイ寮の献堂式においてリチャード夫人は「此建物はハワ寮と申しましても、普通の寮舎ではなく、どうぞこれが『平和のお宮』であるようにと私は希望して止まぬのでございます。また私はここに鍵を持っておりますが……」と人間の間における友愛の門、知識の門、了解の門、信頼の門をそれぞれ開く五つの鍵を委託状とともに、当時の総長湯浅八郎博士に渡されたのである。

御所の東隣りにあるハワイ寮は今は古ぼけたいわば古典的な建物になっているが、設立当時の建物は、内外ともに美しく近代的な設備を誇っていた。建物の色調は版画研究家として有名であった女流画家エリザベス・キース女史の手にかかり、室内は温水暖房で電燈設備、衛生設備、食堂、社交室、図書室、兼客室などすべて完備され、表門の木戸門は洋風建物に日本趣味を採り入れるために同志社女子部最古のものが利用されるという気の配りようであった。寮の庭園もまた趣好をこらして造られた。

このように恵まれた環境の中で、寮監を中心としてハワイより派遣された者と同志社の

学生数名が共同生活をはじめたのである。以来今日にいたるまで、設立当時の伝統をうけつぎ百十数名の有能な学生を世に送り出してきた。彼らは勿論入寮にあたって寮のもつ性格、目的、責任を十分に認織し、厳格な試験を通過して入寮を許されたのであった。

この三十年近い年月の間に寮監もまた変り、第一代の黒川氏以後、現学長上野直蔵博士も臨時寮監として奉仕された。大平洋戦争の終結とともに、宣教師ジョン・ヤング氏を寮監に迎え、神学部その他で教鞭をとられながら混乱した世相の中にあってよく学生の面倒をみられ、ハワイ寮の再出発のためにあらゆる困難に対処されてきたのである。一九四七年から六一年の長きにわたって、その間二年をのぞいて、ずっとハワイ寮のために尽されたヤング先生も、この一月九日引退されて米国に帰国されることなった。引退といっても二年間は米国の諸教会を廻り日本の事情を説明され日米親善のための大役が待っているとのことであった。また神学部教授ロイド博士もヤング先生不在の二年間寮監として献身下さり、学者である先生の御研究を妨げたことである。そのほか、神学部の土昭夫教授、深田講師も短期間ながら寮生と生活をともにして下さった。ヤング先生が寮監を退かれて後、後任として一九六一年より現寮監ジョン・ラッシィー氏を迎えた。若くそして新鮮な感覚と日本にたいする深い理解をもつ氏の活躍はハワイ寮に新しい息を吹込んでおられる。

私が寮生活をはじめたのは一九五五年で、寮則によって二年間寮にお世話になった。それ以前の生活はよく知らないけれども、寮生活に基盤をもつ学生々活は忙しく且つ楽しい日々であったことをおもう。寮の行事のいくつかを紹介してみよう。毎日曜日には夕拝が寮でもたれる。同志社内外の先生方を奨励者として招き、同志社女子大学、共学の女子学生、その他の学生の出席を加えて祈りの一時をもつのである。夕拝の司会はすべて寮生によって行なわれる。神学生でない寮生にとってこれは全く新しい経験である。特にキリスト者でないものにとって最初はアーメンという言葉すらうまく口に出ない者がある。夕拝後の一時間は寮生によるサービスで紅茶と菓子で憩いのときを過す。討論にゲームに女子学生その他の人々を招いて実に楽しいものである。それが終ると女子学生を寮、家までエスコートする慣しがある。寮生は、このときとばかりにナイト精神を十分に発揮する。この熱もまだ冷めやらぬうちに深夜にわたって寮会が開かれる。寮会は寮の行事その他の問題を討議する場であり、一夜を興奮のうちにあかすことも少くない。十二名の学生は自分の主張を曲げられることを屈辱と感ずるからである。かくてゼントルマンシップとともに闘争心が植えつけられるのである。

毎水曜日夜には英語を通じて討論のときがもたれる。English Session である。寮監が代々米国又は英国人であるため、英会話を通じて国際的な問題を論じあうとともに、国際的感覚の養成にこれつとめることになるわけである。毎火曜日には寮外にも公開される英語によるバイブルクラスがあり、寮監がこの指導にあたる。また一ヵ月に一度 Japanese Session があり、同志社内外の先生を講師に招きアカデミックな討議がされる。寮生それぞれの専門分野以外の知的教養を身につけるためである。この外、春秋にガーデンパーティが開かれる。寮内の庭に各自の電燈スタンドをもち出し、ホークダンス、ゲームに興じ、キャンプファイヤーの火がおとろえる頃一同

輪になり祈祷をもってパーティを閉じる。もちろん女子学生その他の人を招いて行なわれる。よく晴れた同じ春秋に女子学生とともにピクニックにでかけ、大自然の空気を胸一杯吸って帰るのも楽しい行事の一つである。クリスマスの祝会、キャロリングもまたよき想い出の一つである。

一年の忙しい学生々活が終りに近づく頃、一年間の寮の歩みと卒業生、女子学生、寮生の投稿よりなる「アロハ」が出版される。そしてやがて学校の学年末の試験がやってくる。寮内は試験ムードに満ち沈黙のしばらくが過ぎる。試験がすむと一年の寮生活も終わり、すべてを忘れ寮監とともに三、四日の旅行にでかけるのである。一年間に積立てた貯金をもって。

このように寮の生活は忙しく楽しい。入寮を許された学生は確かに恵まれている。しかし彼ら自身が経済的に恵まれているとはかぎらない。大半の寮生は何らかのアルバイトをやっている。学生々活の苦しみと忙しさを克服し楽しく生活ができるのは寮の使命を自覚し、それに生きようとする努力からでてくるものであるようにおもう。

卒業後の寮生は一九六二年に結成されたFriend Peace Societyに籍をおき、寮との関係を持続する。年一回ハワイ寮の設立記念日にはリュニオンがもたれ先輩・後輩水入らずで意見の交換を行なう。卒業後、海外に行く者が多いのもハワイ寮出身者の特徴であるかも知れない。

ハワイ寮は以上のように、毎年六名づつ入れ代りつつ今日までよき伝統を引きつぎ発展してきた。これには寮監はもちろんのこと、寮運営委員の先生方、殊にアリス・グイン先生、経営学部の松井七郎博士をはじめ歴代の総長、学長、学生部長、その他の人々の支援に負うところ大である。さらにこの寮の設立、維治に功労のあったリチャード夫妻をはじめ数多くの海外の人々の愛と奉仕に負うことが大きいことを忘れてはならないであろう。キリスト教的愛の精神にもとづいて建てられたハワイ寮は今後も東西文化のかけ橋として、さらにその使命をを果してゆかねばならない。このよき遺産を一部の学生がうけつぐという消極的なものであってはならない。全同志社が国際親善と平和の宮であることを願わずにおれない。

現寮監ラッシー氏を中心に目下新しい計画ができつつある。それは現在の古びた建物を再築し、規模を拡大し、さらに東西文化の交流を密ならしめるために米国との間に学生交流の計画もすすめられている。この意味でハワイ寮は新しい発展の段階にあるようにおもう。私はこの計画が数多くの人々の理解と援助を得て一日もはやく実現するとともに、全同志社のよき伝統と遺産を大事にし、それを発展さすことができるように祈っている。

（経済学部専任講師・経済統計論）

本誌購読受付中

本誌は学校と卒業生の活動状況を伝える同志社の機関誌です。

購読料　一年分六百円（送料とも）

京都市上京区烏丸今出川
同志社本部内
同志社時報編集部